

## エッセイ

### 金沢にスタア劇場があった、映写機をまわしていた

太田 義幸 通りすがりの映画好き

大学四年間を金沢で過ごした。

その時に、日本海側では美人が多い県とそうでない県とが交互に並んでいると聞いた。それは戦国時代に強いお国は隣の弱いお国の美しい娘をかつさらってきたからだと言われた。真偽は分からないが、言われてみると日本の北から秋田美人とは聞くが山形は；、新潟も美人のイメージはあるが、その南隣の富山県は純朴だが美人との印象は薄い。その隣のお金沢がある石川県の娘たちは美しく、その南隣の福井県はどうだろうと言うことである。

勝手な印象であり、県によって美人かそうでないかが決まるものではないが、ただ、金沢では中学生や高校生の一団を見ると、必ずと言っていいほど、そのグループの中に一人は美人と呼べるような顔立ちの生徒がいたような気がする。これも加賀百万石の恩恵であったのだろうか。

そんな美人を擁する金沢にある紫錦台中学校のすぐ表に

スタア劇場（「スター」ではなく「スタア」というのが嬉しい）という映画館があった。

当時、大学で映画研究部に所属していた関係から、その映画館で映写機をまわすバイトをすることとなった。当時よりさらに昔はフィルムは可燃性が高く、映写技師の国家資格なんぞが必要であったが、私がバイトしたころは資格は必要なかったようですな。

そのスタア劇場でも以前は一般映画を上映していたらしいが、当時はいわゆるところのピンク映画館になっていて、日活系ではなく大蔵映画や新東宝の作品を上映していたように記憶している。ピンク映画館ならピンク映画館らしく、ちょっと込み入った裏通りでコソツと生息していればよいものを小立野通りという表通りに面していて、しかも裏口などというものはなく、入口は正面に一箇所のみ。そこに毎日夕方にタクトという原チャリで私は出勤していた。当時、原チャリはノーヘルメットでもよい時代であり、部活帰りの女生徒の集団に顔をさらしながらピンク映画館に入っていくのは、実に奥ゆかしいものがあった。

スタア劇場の従業員は、映写室に山と単行本を積み上げていた読書家のベテラン映写技師さんと、とてもいい人だけど

見目麗しいわけではなかったモギリのおばちゃん、支配人であった。

毎日、帰りがけにこの支配人からバイト代（時給四百円くらいだったかな）を手渡しでもらっていた。おこずかいをもらう子供のように、当時はやたらと小銭が財布にたまっていたような気がする。バイトの初日には支配人が、今日からバイトよろしくってことで寿司屋に連れて行ってくれた。でも、最初に「トロとかウニはダメやい。カツパとか鉄火巻きならどんだけでもいいがよ」と言われ、「なんない、ケチん坊かい」って思った記憶があるが、今なら、儲かってもいいないなか、新しいバイト君に寿司をご馳走しようっていう支配人の思いやりを「ありがたいと感謝しなさい」と当時の私に言うでしょうね。

当時は、VHSのビデオが出回りだした頃で、その影響か、スタア劇場の立地上の影響か、いつも客は数人であった。最終の作品の上映中に客が全員いなくなると、当然、そこで上映は終了させてそそくさとバイトも終了。ただし、時給制なのでバイト代はタイムアップ分だけ少なくなるという具合であった。

スタア劇場は古めかしい劇場で、冬は暖房があまり効かず、

通路にストーブを置いて暖を取っていた。で、そのストーブの近くに客が座る、でも映画が映画なので、皆が一定の距離を保って座るといったおもむき深い光景が展開されていたものである。

スタア劇場はピンク映画館なのだが、何を思ったのか、たまに「蒲田行進曲」といった一般映画を上映したり、「テス」といった文芸作品を上映したのだが、フィルムの値段の高さか、あまりにも客が入らなかったからなのか、予定もなんのそのダッシュの早さで打ち切り、何事もなかったようにピンク作品のラインナップに戻ったことが何度かあった。

当時の映写機は投影するための明るさを出すためにかなりの熱を発生し、狭い映写室は熱に包まれて夏なんて堪ったものではなく、ベテラン映写技師さんは常にランニング姿であった。「ニュー・シネマ・パラダイス」でアルフレードが白のランニングでいるシーンがあるし、私が四日市でモギリのバイトをしていた中映の映写技師さんも白のランニングを素敵に着こなしていた。白のランニングシャツは、映写技師にとって全世界共通の当然のユニフォームだと確信している。

また、映写機のあの独特のカタカタカタという音は結構う

るさいのだが、古い映写機ということもあり、たまにそのカタカタという音がバキバキという音に変わる。これはフィルムが映写機のどこかに噛んでしまい、フィルムが引きちぎられた音である。当然、スクリーンは真っ白に。あわててフィルムをセットし直すのだが、これがなかなか上手くいかない。映写機は二台並んでいて、片方のフィルムが終了すると、もう片方の映写機からの投影にチェンジするのだが、フィルムが引きちぎられた映写機の投影分の残りが少ない場合は、まあいいかって具合で、もう一方の映写機に切り替えたこともあった。場合によっては肝心なシーンを端折って上映したかもしれないが、ピンク映画を鑑賞しているお客さんは、その辺のところは寛大な心をお持ちだったということでご容赦いただきましょう。

そんな、私の小銭稼ぎのスタア劇場も、私がバイトしていた昭和59年に閉館してしまった。

スタア劇場で働いていた人たちは、その後どうしたのかと思っていたら、ベテランの映写技師さんは、片町の金沢劇場（だったと思う）で相変わらず映写機を回していると聞き、一度映写室に遊びに行った。相変わらず本を山積みにしていて元気そうであった。もちろんランニング姿であった。それ

が嬉しかった。

### 四日市のシネマ体験（その3）

藤田 明 映画評論家

1958年4月、社会人になる。就職はどん底のころで、2月には神戸での勉学継続が決まっていた。3月末に亀山で週2回ほど教えてほしいと連絡が入り、草津線経由の姫路行SL快速による往還にも期待を抱いた。ところがやがて松阪へ、と変更を耳にし、神戸への夢は破れる。県の教員採用試験に合格しても採用保証のない当時、普通なら喜んでしかるべき朗報が人生を狂わせたと言えよう。家の事情や病弱の件も雄飛をはばませ、自らに説得をかけたわけだが、後者に関しては、飯島正の自伝風エッセイの影響も否めない。同じ病だった同級生、梶井基次郎の剛胆とは逆に、体への気遣いの徹底を範としてしまっていたのである。

松阪での思い出の最大は演劇部顧問。夏休み返上に等しく、練習ひとすじの部員たちに付き従った。コンクールの東海大会に出場、舞台装置のこともあり、名古屋の安宿に全員、前泊したのを思い出す。

松阪で見た映画。ポーランドの『地下水道』が圧巻。巴映劇へ同僚と3人で出かけた。小津の『彼岸花』はいすず会館。

思い出深い作品は見た劇場も同時に記憶されるが、アストリ  
ユックの『女の一生』は津の大門劇場。市川崑『炎上』は木  
本。通信教育生のスクーリングを終えた後で、その2日間は  
初めての熊野行でもあった。

59年4月尾鷲に赴任。紀勢線全通の3か月半前である。  
『浮草』のロケハンで小津らが矢の川峠経由、尾鷲駅前に着  
いたのは6月10日。まだSL時代である(知ったのは30  
年後の日記公開時だが)。『浮草』全国封切りは11月。尾鷲  
の大盛座へ来たのは年末年始だったろうか。そう言えば『鉄  
道員』をロマン座で学校ぐるみ午前中に鑑賞。前年公開作が  
遅れて来た例である。成瀬の『罅雲』は松阪近劇、津に帰省  
の途中だった。

60年は安保の年、ヌーベルバーグ絶頂期だが、紀伊長島  
へも波は及び、中劇で『唇によだれ』を再見している。前年  
公開の『灰とダイヤモンド』や『青春群像』も最初は津の大  
劇、二度目は長島だった。尾鷲の3館には来なかったわけだ。  
そのころ年末の伊勢新聞に映画の年間回顧を寄せていた  
が、この年の邦画1位は田中絹代の『流転の王妃』。フラン  
ジュの『顔のない眼』は、津の中日劇場だったが、洋画の方  
で特筆したのか、どうか。

61年の首位は増村保造『妻は告発する』。『小早川家の秋』  
が次。前者は津の曙座だった。尾鷲で井上和男の『熱愛者』  
を見たのを覚えている。洋画のトップは『夜と霧』、これは  
尾鷲のロマン座か。

最初の松阪では、まだ芸術至上主義を保っていたが、尾鷲  
の3年間で自分ながらずいぶん変わったと思う。学校とい  
場を通して社会的な目を持つようになった。また国語教育に  
のめり込んで県内外の有志とつながっていく。紀州という土  
地柄にもひかれた。去る最後の日は教え子たち10人ほどと  
近くの便石山に登り、夕方の松阪行最終列車の窓から見送っ  
てくれた彼らに手を振った場面を思い起こす。

62年4月、四日市へ転勤した。それまでの4年間、四日  
市で見た映画は皆無に近いが、近鉄駅前のニュース映画館へ  
入ったような気もする。62年公開の洋画では、ヴァディム  
の『血とバラ』にひかれた。国鉄四日市駅に近い踏切を渡っ  
たロマン座である。ベッケルの『穴』は四日市シネマ。ワイ  
ラーの『噂の二人』はどこで見たのか。ATGが始まり、名  
古屋の名宝シネマ通いは欠かさなかった。『尼僧ヨアンナ』  
に始まり、『野いちご』、『おとし穴』…と続く。

62年の邦画で吉田喜重『秋津温泉』、深作欣二『誇り高

き挑戦』ほどにも小津『秋刀魚の味』を当時、買わなかった。あの軍艦マーチの深い意味を読み解くには年齢を重ねる必要があったと今にして思う。(続く)

### 【付】上半期(2016年)の外国映画

目の手術で入院、その後熱中症で救急車に…前号の【付】欄に続く澤井さん追懐は、そんな次第でまとめられず、また今号は過去の体験ばかりだったので、うんと新しい風を添えたくなりました。ベスト5と行きましょう。

- ① 火の山のマリア                   グアテマラ
  - ② 山河ノスタルジア               中国
  - ③ 母よ、                               イタリア
  - ④ 消えた声が、その名を呼ぶ       ドイツ
  - ⑤ ロイヤル・コンセルトヘボウ     オランダ
- ①はネオ・リアリズムの初心に通じていた。私の文章の文体はネオ・リアリズムだと、かつてMさんに言われたこともあるが、戦中・戦後体験からは離れられない自分という件にも気がついた。②はジャ・ジャンクーの円熟。社会的視野に加え、伝統・自然への目も。今回は長江でなく、黄河だったのも一興。主演女優が伴侶と知って複雑な思いにも駆られる。
- ③は家族映画はかくあるべしの例。ナンニ・モレッティのこ

れまでには疑問も付きまತ್ತたのに今回の社会性に驚嘆。内向きか、付け焼刃の日本映画の現状を照射してやまない。④は難民虐殺。トルコ系ドイツ国籍のアキンがアルメニア人のオスマントルコによる弾圧・大虐殺(ナチス以前の)問題を掘り下げた。シリア難民の今日以前に企画されたことも拍手。後半、キューバや米大陸へ移ってメロドラマ大作に傾いたのは惜しいまれる。⑤にメンゲルベルク、ベイヌム、ヨッフムの映像がないのも残念。その点を除けば一般の音楽ドキュメンタリーとなるのを避け、ユニークに仕上げて新鮮。本拠地のステージには指揮者が降りてくる独特の階段、それが見られたのも嬉しい。次点は『スポットライト』と『ひつじ村の兄弟』『サウルの息子』『緑はよみがえる』のいずれか。『グランドファイナーレ』は面白いものの、だまされた感もつきまとう。



原作をたずねて

## 「レナードの朝」の衝撃

安井廣之 クリニック院長

一本の映画で、人生が変わることがある。

『レナードの朝』で、私はそんな体験をした。

一九九一年七月。私は暗いトンネルの中にいた。四九歳、失職。妻と小学生の子供二人がいる。これからどうするか急いで決めなければならぬ。隅田川沿いにあるマンションは会社借りあげで、八月末までに出なければならぬ。

まあ、なんとかはなるだろう。これまでも、幾度か浪人はした。そのたびに、押しとはったりと努力と前向き姿勢とで、今まで食いつないできた。

これからどうするか。

国際ビジネスの世界には、ほとほと嫌気がさしている。だから後のことも考えずに辞表を出し、残っていた有給休暇を取ったのだ。これから住む家はない。子供たちをどこかに転校させねばならない。

西銀座の、もと日劇の白い建物のあった場所に建つ壮麗なビルの中に、新聞の広告に出ていた「レナードの朝」の上映館があった。

ロバート・デニーロとロビン・ウィリアムズが主演し、監督はペニー・マーシャル。

たいていの映画は原作の小説の方が優れている。私は原作を読まないで、その映画を観た。

並みの映画ではなかった。いきなり心の中にはいつてきて、いわば魂を驚つかみにされる思いだった。私は動けなくなるほど感動した。

館内が明るくなっても、あふれる涙を抑えることができず、観客が全部出て行ってからも、ハンカチを目に当てたまま、しばらく椅子に座っていた。

外に出ると、夏の日差しが照りつけていた。晴海通りを車が駆け抜け、数寄屋橋交差点では、信号待ちの人たちが群れをなしていた。いつもと変わらぬ東京の風景だった。地下鉄に乗る気にならなかったの、日陰を選びながら、歩いてマンションに戻った。

妻に言った。

「俺、また医者をやることにしたよ」

とは言っても、私は一〇年近く臨床から離れている。その間に医学はずいぶん進んでいた。製薬業界で薬の開発を担当し、医学部の教授連中との付き合いもあったので、どのくらい進んでいるかは分かっていた。私には医師免許はあるものの、そして先端の医学がどんなものかという知識はあるものの、技術はない。そんな医者を雇ってくれるところがあるだろうか。

日本医事新報を買い、医師求人欄をめくった。

## AWAKENINGS

映画『レナードの朝』の原題は「AWAKENINGS」である。

「目覚め」という意味であるが、そんなタイトルでは、思春期の若者を描いた映画と勘違いされてしまうだろうから、一ひねりして付けた題名と思われる。

複数形だから、いくつもの目覚めがあったということだ。映画のクレジットには、原作がオリヴァー・サックスと出てくる。

日本橋丸善に行っても、シナリオは見つからなかった。も

つとも、この映画の英語は四文字の卑語も出てこない品のよいもので、シナリオを見なくてもほとんど理解できる。が、是非とも原作を読んでみたい。

何軒か洋書店を回るうちに、イギリスで出版された英語の原著を見つけた。表紙は映画の一場面のスチル写真で、海岸に近い岩場で両手を挙げるレナードと突堤に立つセイヤー医師が写っている。四〇〇ページ余りある大判のペーパーバックだ。\$4.70の値札が貼ってある。タイトルの下に「NOW A MAJOR FILM STARRING ROBERT DE NIRO AND ROBIN WILLIAMS (ロバート・デニーロ、ロビン・ウィリアムズ主演で映画化)」と記されている。

原著は小説なんかではなく、一人の医師の書いた二〇人の患者の症例集だった。それも、単なる症例の寄せ集めではなく、患者との深い交流を描いたものだった。そして、著者であるオリヴァー・サックスはニューヨークのアルバート・アインシュタイン医科大学の神経内科学教授である。初版は一九七三年で、私が手に入れたのは一九九〇年版であった。

患者であるレナード・Lに割かれているのは、本文で七ページ、エピローグで四ページの計十一ページだけだ。本全体にわたってページの下欄に細かい字の注釈があり、読みき

るには、かなり時間がかかりそうだ。

私は、職探しの合間を縫って、暇さえあればこの本を読んだ。

一九二〇年前後に世界中で嗜眠性脳炎の大流行があり、当時それは「眠り病」と呼ばれる謎の病気だった。高熱が去り眠りから覚めても、重い後遺症が残った。その主なものが、体が「固まって」しまう、あるいは「凍りついて」しまうという症状だった。

サックスは、これらの症状をパーキンソン症候群と考え、パーキンソン病の特効薬として登場してきたL・DOPAを投与した。

その記録が、「AWAKENINGS」という本になった。

レナードは幼いころ嗜眠性脳炎にかかった。その後、一五歳で右手が硬直し始め、ハーバード大学を卒業したのち、三〇歳で体が石のように固まってしまった。以後、入院生活を送る。そして一九六六年の春、四六歳のとき、サックスが彼を担当した。

サックスは一九六九年三月に、彼にL・DOPAを投与して「目覚め」させた。レナードは一時ほぼ健常人に近いところまで回復するが、やがて薬に過剰に反応するようになり、

顔面や四肢の痙攣や異常運動、精神の高揚と興奮、性欲の異常昂進、暴力行為等制御不能の症状を呈するに至り、L・DOPAは中止される。

もとの不動の状態に戻ったレナードに対し、サックスは断続的にL・DOPAやアマンタジンを投与するが、一九六九年の「目覚め」が再現することはなかった。

最後には、レナードが「薬をやめて死なせてくれ」と強く望み、それをサックスが聞き入れて、患者は一九八一年に穏やかな死を迎える。

## 映画「レナードの朝」

映画は素晴らしい出来だが、原作とは別物である。

ペニー・マーシャルは、原作全篇にあふれるサックスの患者に対する深い思いやりと友情を土台に、自分なりのレナードを主人公に仕立てて、心を揺り動かすドラマを創りあげた。

この映画では、脳炎後のパーキンソン症候群を演ずる俳優たちの信じられないほどの迫真性にまず目を奪われる。健康な俳優たちが病院というセットの中で病人を演じているのだが、彼らは見事に本物の病人である。医者のが見ても、病人にしか見えない。



中でもレナードを演ずるデニーロの演技は抜きんでいて、懲罰のために入れられた精神科病棟で、セイヤー医師と向き合っているのは重度の錐体外路障害を持つ患者以外の何者でもない。また、思いを寄せるポーラに別れを告げ、彼女を見送るために窓際まで歩いてくる姿、彼女を見やる悲痛の表情の中にある神経障害性の筋肉の動き、彼女を乗せたバスが行ってしまってから部屋に戻る後ろ姿。どのときのデニーロをとっても、彼は重度の神経疾患の患者である。L・DOPAでほぼ健全人のようになったときですら、彼はその表情の中にわずかな引きつりを残す。見事としか言いようがない。

サックスは、撮影期間中のデニーロについて、彼には本当に神経系に異常があるのではないかと何度も思ったと書いている。ときには、脳波計を付けて調べてみたいとさえ思ったそうだ。それほどに、彼の演技は真に迫ったものである。デニーロは、自らの役作りのために徹底して研究すること知られている。この映画作りのために、監督と俳優たちはいろんな施設や病院を見学しているが、彼は脳炎の生き残り患者のいるロンドンの病院にまで行き、何日も患者と話し合ったそうだ。そして、患者の一人をして、「あの観察力はす

ごいですよ。体の中まで見つめられたようでした」と言わしめている。

すごいのはデニーロだけではない。セイヤー医師を演ずるロビン・ウィリアムズにも目を見張らされる。一つ一つの動作に患者への感情移入があり、心の動きがその動作と表情に現れる。セイヤー医師はサックスをモデルに役作りされた見え、サックスはロビンといると、目の前に一卵性双生児がいる思いだったという。ロビンもまた相手の心の中にはいりこみ、その相手になりきった自分をカメラの前に登場させたのだ。

忘れてならないのは、母親役のルース・ネルソンだ。彼女は心の芯までレナードの母親になっている。ペニーは表情をアップで撮ることが多いが、撮られる俳優はその役になりきり、その時その場の感情が自分のなりきった役柄から湧き出て来ないと、アップには耐えられない。ルースの場合、身もだえ、目つき、額のしわ、その他何を取っても本物の母親である。

映画の中のレナードは美しく可憐なポーラに恋をし、それがかなわぬと知って、自ら別れを告げる。これは切ない話だ。実際のレナードは、L・DOPAによって性欲が異常に昂進

し、看護婦に性行為を迫るので忌み嫌われたのだが、そんな話では映画が成り立たない。そこは、ペニーが女性の感性で、泣かせる話に仕あげている。温かく寄り添ってくれているだけで嬉しいのが女ごころだと、何かのレポートで読んだ記憶があるが、レナードとポーラの描き方を見ると、ペニーにもそれが当てはまるようだ。

これだけ並はずれた俳優たちを動かし、自分の持つイメージを映像化したペニー・マーシャルは、非凡な監督である。自分自身に人を思いやる温かい気持ちがあり、その気持ちを映画で表現することで、彼女は我々にも他者を思いやる共通の感情のあることを思い起こさせているのだ。

サックスは、映画の終わりの方で、本物の患者でありかつ「目覚め」の最後の生き残りであるリリアン・Tその人が登場する、と書いている。車椅子上で固まっているデニーロの右後方で、これまた車椅子に座っている痩せた女性がリリアンなのだろうか。

## 再び医者

この映画を観たことがきっかけになって、私は再び医者になる決心をした。そして、日本医事新報の求人欄で見つけた千葉県の大きな老人病院に就職した。

東京から離れたくなかったので、江戸川の対岸にある「松戸市にマンションを借りた。松戸は伊藤左千夫の「野菊の墓」の舞台であり、矢切の渡しがあり、市長マツモトキヨシ氏が「すぐやる課」を創ったことで知られる（彼はまた後になってスーパーマーケットも創った）。江戸川を望む高台には、旧水戸徳川家の別邸があり、庭園からの眺めがすばらしい。病院では、若い医師たちからいろいろ教わりながら、必要な技術を身につけた。一年くらいで、この病院で行われていることはほぼこなせるようになった。

AWAKENINGS は、暇さえあれば医局の自分の席で読みつなぎ、間もなく読了した。記念碑的な本なので、今も大切にとつてある。

セイヤー医師を通じて伝えられたサックス教授からのメッセージは今も私の中に生きていて、四日市で開業する私の努力目標になっている。

## AWAKENINGS の邦訳版

原著を読み終えて一〇年ばかり経ってから、書店で「レナードの朝」という文庫本を見つけた。「へえー」と思っ手取ると、あの分厚い原作を全訳したものだった。二〇〇〇年に邦訳が出たのだ。

今回この文章を書くにあたって、現在出ている新版（ハヤカワ・ノンフィクション文庫）を購入した。春日井晶子氏の翻訳で、二〇一五年出版の六五八ページもある大冊である。訳は見事なものだ。神経症候学を相当勉強しないと、ここまでの訳はできない。それに、訳者の原著者への共感があって、これだけの名訳が生まれたのだろう。

映画を観たかたには、是非読んでいただきたい本である。

